

沼田公園と城跡

沼田公園は白根川と利根川を見下ろす、起伏に富んだ広大な緑地である。この公園は江戸時代（1603年～1867年）に沼田藩の行政の中心地となった沼田城の跡地であり、公園内には城郭の一部が残る。4月から10月にかけて咲き誇るさまざまな花々や、利根川流域から武尊山や谷川連峰を望む眺望、市街地から移築されて、現在は博物館として公開されている17世紀の商家「旧生方家住宅」などの歴史的建造物が人気だ。

短命に終わった要塞

沼田公園となる場所に最初に建造物を建てたのは、数世紀をかけて1500年代後半まで現在の沼田市周辺を支配していた沼田家である。1532年、彼らは二つの川を見下ろす要塞を築いた。この場所は戦略上重要な場所であったが、淡水が乏しかったため、ほとんど人が住んでいなかった。城は沼田家が近隣の河川の交通を監視し、越後国（現在の新潟県）や会津（現在の福島県）へと続く山越えの道を監視するための見張り台として機能した。

1500年代後半には、いくつかの一族が沼田の支配権をめぐる争った。最終的にこの地域は真田家の支配下に置かれ、真田信之（1566-1658）の指導の下、領地を開発するた

めに多くの大規模な建設プロジェクトが開始された。真田一族は河岸段丘に真水を引くための水路を掘らせ、段丘に町を作ることを可能にした。1597年、真田氏は沼田氏のささやかな城の跡地に、二重の堀、石垣、門、いくつかの櫓、五層の天守閣を備えた大きな城を築き終えた。城と町の間には武家地が整備され、町は東と南に拡張された。

しかし 1682年、徳川幕府が真田家を失政により追放したため、壮大な沼田城は取り壊された。沼田藩は真田氏以後も多くの藩主を擁したが、やがて土岐氏の手に入った。土岐氏は城の外郭を屋敷に改造したが、平時の統治であったため、城郭の再建には手をつけなかった。

城から公園へ

土岐家は、1868年の明治維新で武家支配が終わるまで、沼田藩主であり続けた。その後、土岐氏は東京に移り、屋敷は廃城となった。1916年、沼田出身の実業家で明治維新以前からその家族が土岐家に仕えていた久米民之助（1861-1931）が城跡を買取った。久米は敷地を公園として整備させ、1926年に自治体に寄贈した。

激動の歴史のため、16世紀の城の遺構は現在、公園内でほとんど見るできない。現存する遺構は、内堀の短い部分や石垣の一部、そして最西端の櫓の基礎部分である。現在は

見張り台の代わりに、推定樹齢 400 年の桜の木が立っていて、この桜の花が咲くと沼田に春が訪れると言われている。公園の鐘楼には沼田城の鐘の複製が吊るされ、毎朝夕 6 時に鳴らされている。オリジナルは 1634 年に鑄造されたもので、沼田市歴史資料館に展示されている。